

報部

FAX 03 (3595) 6911 Eメール tokuho@chunichi.co.jp

チェルノブイリ原発事故最大の被災国ベラルーシで、死亡した人を解剖して臓器ごとの放射性セシウムを測定した医師がいる。ウクライナ在住の病理解剖学者ユーリー・バンダジェフス

キー氏(56)だ。低線量内部被ばくに警鐘を鳴らす研究は当局に危険視され、投獄される憂き目も見た。来日した「不屈の学者」に聞いた。(佐藤圭)

チェルノブイリ事故で警鐘

体内にセシウム 心臓疾患まねく

論文発表後逮捕「不屈の学者」

「たとえ微量であつても、セシウムなど放射性物質が含まれる食品を継続的に食べ続けると、健康被害を誘発する恐れがある。内部被ばくと健康被害には相関関係がある」と

バンダジェフスキー氏は今年十月、市民団体の招きで来日し、二十一日まで東京など全国六カ所

で講演した。日本を訪れたことは昨年春に続いて二度目。チェルノブイリの教訓を日本に伝えるため

旧ソ連のチェルノブイリ原発は現在のウクライナ北部にあるが、一九八六年の事故で最も被害を受けたのは、国土の約23%が放射性物質に汚染された隣国ベラルーシだった。

病理解剖の専門家である同氏は九〇年、ベラルーシ第二の都市ゴメリにゴメリ医科大を創設して初代学長に就任。内部被ばくの影響を調査した。同氏は、人の臓器にど



れくらい放射能があるかを実際に解剖して確かめたことで知られる。一九八八年、ゴメリ市内の複数の病院で、心臓血管系の疾患や感染症が原因で死亡した百二十三人の大人や子どもを調査したところ、心臓や肝臓、腎臓などからセシウム137が検出された。同氏は、セシウム137は特に心筋細胞に蓄積しやすく、心筋障害や不整脈などの心臓疾患が起きやすくなると結論付けた。ベラルーシ人の死因トップは心臓血管系の疾患だ。

「汚染食品食べない努力を」



「健康被害が出ないことを望んでいるが、チェルノブイリの経験からすると、楽観できない。内部被ばくに対処するには、汚染食品を食べないよう努力するしかない。技術力と資金力のある日本は、よりよい食品の放射線管理システムを確立できると信じている」

による小児甲状腺がんし「政治的意図による冤罪」と非難する中、刑期は、事故以来住民が被ばくの論文を発表したたもの、ベラルーシを直後の九九年、収賄容疑 国外追放された。現在は突然逮捕される。一貫 ウクライナで研究を続けして無罪を訴えたが、二ている。同氏は「私の研究が海 『国家へのクーデター』とみなされた」と振り返る。逮捕後、ベラルーシ政府は、事故以来住民が避難していた汚染地域への「再入植」方針を打ち出した。「ベラルーシ国民の放射能への意識は高いが、政府が内部被ばくの影響を軽視している以上、汚染地域で静かに生活するしかない」

チェルノブイリ原発事故後の健康被害について講演するユーリー・バンダジェフスキー氏。20日、東京都新宿区で

「不屈の学者」